

看取るあなたへ

終末期医療の最前線で見えたこと

細谷亮太

内藤いづみ

小澤竹俊

秋山正子

鈴木雅夫

奥野滋子

堂園晴彦

高木慶子

志真泰夫

山崎章郎

川越厚

長尾和宏

「あなたの大事な人が

旅立つ時には、

よく頑張ったね」と

手を握って

あげてほしい――」

島藺進

大西秀樹

徳永進

柏木哲夫

金田諦應

垣添忠生

石垣靖子

奥田浩史

終末期医療の
プロフェッショナルが伝える
看取りのかまえ。

無常の中にある終活

長尾和宏

医療法人社団裕和会長尾クリニック

二〇〇〇余人の死からの学び

勤務医時代に一〇〇〇人以上の病院死を、二〇年前に開業医になってからはさらに一〇〇〇人以上の在宅死を見てきた。あわせて約二〇〇〇余人の最期を見てきたが、どれもひとつひとつが大きな本になるような「物語」であり、千人千様であった。とても普遍化できるものではないが、大雑把な話をさせて頂くと、私自身が経験した病院での延命死と在宅での平穏死は天国と地獄であった。すなわち在宅での平穏死＝自然死＝尊厳死であり、端的に言えば枯れて死ぬことだ。一方、病院死とは溺れ死にである。両者の体重差は一〇キログラム以上ある、と言ったほうが分かり易いかもしくない。最期の一〇日間に一日二リットルの点滴をするかしないか、すなわち二〇リットルの水分を入れるか入れないか、と言ったほうがピンとくるかもしれない。無知だった勤務医時代に溺れさせて管まみれにして苦しませて見送った一〇〇〇人の患

者さんへの懺悔が本を書く動機になっている。枯れたほうが痰や咳で苦しむことや痛みが圧倒的に少なく、かつ長生きできるのでいいことばかりだ。しかしなぜそのいいことばかりの「枯れて死ぬこと」が約二割の人しかできないのかを一緒に考えてみたい。

父の自死というトラウマ

私は一七歳まで死を考えたことが無い平凡な高校生だった。しかし高校三年のある日、うつ病で入院を繰り返していた父が京都のある神社の裏山で自死した。警察から連絡を頂き、死後数日経ちこれから火葬場に向かうという父の顔を一週間ぶりに見た。遺体は警察署の片隅にある物置のような場所にあった。父の顔を見た瞬間から、私のその後の人生の全てが変わった。「死んだら終わり」と心の底から思った。高校に行かなくなり大学受験にも失敗し、フリーター人生となった。母子家庭ということで周囲の勧めもあり自動車会社の夜のラインで働くことになった。死ぬほど酒を飲み(今でもそうだが)、暴走族のようにバイクを飛ばし、いつ死んでもいい、と思いながら二〇代を生きていた。三〇歳までに死ぬ予定であった。特に理由も無くそう確信しながら「刹那的」に生きていた。いや、今もそうかもしれない。大学に入ってほとんど学校に行かず、バイト、無医地区活動、野球、酒の四つの繰り返しが無茶苦茶な六年間を過ごしていた。

医者になったその日から二年間、新大阪にある小さな救急病院でほとんど毎日当直しながら不眠不休で働き続けた。「いつ死んでもいい、今日なら本望」だと思っていた。おかげで卒後